

小指の花びら



小指の花びら 2

金曜を除く平日は、終電がなくなると共にお客さんもみんな帰ってしまう。そうなる綾姉がそわそわし始めて、やがてお店の鈴が鳴る。新浜さんのご来店だ。

「昼は春みたいなんだけどなあ。夜はやっぱり冬だ」

そう言いながら彼はソファに深く腰を下ろした。綾姉は彼のコートをクロークにかけてから、ずっと隣に座る。そしていつのまにか用意していたお絞りを彼に手渡した。こういう時の綾姉は所作に擬音をつけたくなるほどきびきびしておもしろい。私は二人分の飲み物をテーブルに置くと、そそくさとキッチンへ退散した。お店に流れる音楽のボリュームを少し上げ、たまっていた洗い物を静かに洗う。二人の会話は聞こえないけれど、綾姉の体がゆっくりと傾くのが見えた。

私は新浜さんのことをよく知らない。知っている事と言えばウイスキーしか飲まないことと、綾姉の同棲相手だという事くらいだ。ときどき、深夜を過ぎてもお客さんがいるときなんかは、キッチンに備え付けの小さなカウンター席に座ったりする。綾姉がキッチンに立つことはまずないので、必然的に私が相手をするようになってしまうのだけれど、新浜さんも私も特に内容のある話はしない。私が話しかけても二言三言で会話は終わるし、彼の方から話しかけてくることもない。いつも静かにウイスキーを飲んでいるだけだ。

前に一度「綾姉は新浜さんのどんなところが好きなの？」と聞いた事がある。そのとき彼女は「全部」と答えてから「いや、一部」と言いなおして自嘲気味に笑った。

「どこにでもいそうなおじさんに見えるでしょう？」

私はためらいながらも頷いたが、綾姉はそれ以上は何も言ってくれなかった。しかしその横顔から読み取れたものがひとつある。どこにでもいそうなおじさんに、あの綾姉が負けてしまうことだ。

洗い物を終わってしまうと、やるべきことはあとわずかだった。冷蔵庫の食材をチェックして、ごみをまとめ、今日一日の簡単な流れをお店の手帳に書き込む。それだけ。経理は綾姉の担当なので、私は数字以外の事を書く。

彼女は何かにつけてこの大きな手帳をよく読んでいた。

この店にとって手帳というのはとても大事なものらしい。

私がレムにで働き始めたときも、一番最初に教えられた事は手帳の書き方だ。

B五サイズくらいの革製のバインダーを手に持って「これがお店の手帳ね」と言われたときは日誌みたいなものかなと思っていた。

しかしそこには一日のスケジュールはもちろん、その日やるべきことや「昨日やれなかった事」まで

書き込まれている。

それが手帳の左側。

右側は白紙のノートになっていて、ここにはその日に起こったことや気付いた事などをびっしり書き込むよう教えられた。

ちなみに余白が多いと再提出を要求される。そのへんは学校の日誌と似ているかもしれない。

「感じたことは何でも書き込んでね。その日の天気や温度、気分、体重でもいいし何日目かでもいい。

ああ私たちにそれはなかったっけ。とにかく、これは書くために書くんじゃなくて、後から読むために書くものなの」

今日起きたトラブルはその解決策と共に手帳に記入され、未来に同じ問題が起きた場合の処方箋になる。

一年前に一度来ただけのお客さんも、ページをめくれば昨日の事のように思い出す事ができる。手帳は自分の記憶を補完してくれる大事な道具だと綾姉は教えてくれた。

それならパソコンで管理した方が閲覧・検索の面で便利なんじゃない？ と言ったら彼女はその提案をあっさり跳ね除けた。

「パソコンなんて、野暮ったいわよ」

真顔でそう言う分には格好いいのだけれど、パソコンを使えない綾姉が言っても説得力に欠ける。

でも、お店にノートパソコンを置いて、そこでちょくちょく入力しているよりは、手帳に何か書き込んでいる方が確かにスタイリッシュだ。

ぱらぱらとページをめくるのも手帳でなければ出来ない。

もちろん、欲しい情報を探すためには少し時間がかかってしまうし、ペンで書き込むのも一苦労なんだけど。

私は手帳のページを適当に開いてみた。

六月二六日月曜日。今より約八ヶ月前、私がまだここに来ていない頃だ。

手帳に綾姉以外の字は見当たらない。

朝から夕方までは空白。この空白の時間に彼女が何をしているのか、私は今も知ることができないでいる。

そしてその不自然な空白を埋めるようにして買出しのメモが書き込んであった。

玉子、牛乳、豆腐、お惣菜が、六人前……これはお客さんに出す分だろう。

綾姉は料理が苦手なのだ。夜の八時にひとみちゃんとトーコが来ている。

本当にあの二人はレムが好きなんだなあ。

その後は栄子、マリアなど私の知らないお客さんが数名。

料理は足りたのだろうかと不安になったけど、右側のスペースにそれらしい事は

書いていなかったの、多分足りたのだろう。

昔は今ほど料理の注文がなかったらしいけど、なるほど、一人で何人ものお客さんを相手にしていれば料理を作れるはずがない。

手帳の右側にすごい書き込みを見つけた。

「マリアが焼酎ロック十二杯、ひとみちゃんは十五杯」

ひ、ひとみちゃんってそんなにお酒に強かったのか。

いや、強いなんてもんじゃない。人によっては致死量だろう。でも二人ともちゃんと電車で帰っている。

私はこの日のレムを想像して楽しくなった。

それと同時に、この日を一人で乗り切った綾姉のタフさにため息が出た。

「その日はね、私も飲んでたのよ」

いつの間にか綾姉が側に来ていた。手には皮製の伝票入れを持っている。

私はそれを受け取り、お釣りを挟んで綾姉に渡した。

「綾姉はどのくらい飲んだの？」

すると彼女は何も言わず背を向けて、指を二本立ててからリビングへと戻っていった。

それが勝利を表すピースサインなのか、数字の二十なのかはわからない。

どちらにしても褒められたものじゃないだろう。

新浜さんが帰るとレムの営業は終了となる。

彼と一緒に綾姉も帰ってしまうこともあるが、今日はお店に残っていた。

仕事場に好きな人が来てくれるというのは、贅沢に見えるけれど実はつらい事なんじゃないんだ

ろうか。

なにせ一日に二度別れるのだ。

しかし二度また出会える事も考慮すると、やっぱり贅沢なのかも知れない。そんな事を考える私には恋人と呼べる人はいないのだけれど。

「さて！」

そう言って綾姉は嬉しそうに私を見た。いやな予感がした。

「えーと、もしかして、反省会？」

「反省会？ 違うわよ。反省するのはあなただけ」

やはり嬉しそうに言ってから、彼女はキッチンのカウンターテーブルに肘をついた。目が飲み物を催促している。

話の前置きから考えて泡の出る飲み物を要求しているのは間違いない。いや、彼女の場合いつでもそれを要求してくるのだが。

「ま、とりあえずお店閉めてよ」

「あとはそのグラスを洗って、電気を消すだけです」

「じゃあ、ミキも飲み物持ってこっちにいらっしやい」

私は言われるままに彼女の隣に座った。自分の分の飲み物を何にするべきか迷ったが、結局私も泡の出るやつにした。

「おつかれさま」

グラスが鳴り、喉が鳴る。仕事の後のビールがおいしいと思えるようになったのはつい最近の事だ。綾姉に付き合っているうちに体が欲しがらなくなってしまった。プレマリンを飲んでるのであまり肝臓に負担をかけない方がいいのだけれど、たまに飲む一杯くらいなら大丈夫だと思い込んでいる。ビールがおいしいのは大変結構なんだけど、この時間は私にとってあまり嬉しいものではない。

綾姉は手帳をめくっている。そして何も言わない。私は今日の自分の仕事を必死に思い出して

いた。

「心当たりはあり過ぎるんだけど」

「あら大変ね。ひとつひとつあげてみる？」

綾姉は容赦しない。

私が怒る隙間もないくらいきっちり攻めてくる。

私が今思いついた事なんてものは彼女だって既に気付いていることなのだ。

失敗は失敗と分かるからまだ良い。

問題なのは私が失敗と捉えていない何かに気付いていない事だ。

そんな事、どうしようもないじゃないか。と思っはいけない。それは、この店のガイドライン。

レムで一番大変な仕事は何かと聞かれれば、私は迷わずこの時間だと答えるだろう。

厄介なお客さんが来たとしても、やるべき事をやっていれば時間は過ぎていくし、

トイレがゲロまみれになったって、洗って洗って洗ってしまえばあとには何も残らない。

しかしここで綾姉と話していると、私は自分の尊厳を自分自身でずたずたにしなければならない

自分を痛めつけるのはいやだ。それはなんだか救いのない行為のように思える。

「私、綾姉にはかなわないなあって思う」

「つまんないこと言うのね」

「ちがうよ。そういうんじゃないで。その……」

うまく言葉を見つけられない。

綾姉のようになりたいというのではなくて、かといって綾姉のやり方が嫌なわけでもなく、

こういうのを、なんていうんだっけ？ 眉をしかめてビールを飲む私に、綾姉が助け舟を出してくれた。

「悔しかった？」

それだ、と思ってしまう。

「……うん。悔しかった。綾姉がトコをひょいってすくい上げた時だよ？」

「わかってるわよ」

綾姉は何でもお見通しなのだろうか。もしそうだとしたら、私が喋る意味なんてあるんだろうか。

ふと、中学校のときに使っていた参考書のことを思い出す。

赤い字で印刷された解答。そこに重ねるための赤くて透明なプラスチック板。

綾姉、その赤い板をのけて頂戴よ。そしたら答えがわかって、それを覚えればいいだけなんだから。

綾姉がぼつりと言った。

「香里ちゃん、きれいだったね」

長いスリットの入った黒いチャイナドレスを着た香里さんを思い出す。嬉しそうに笑っていた。

綾姉の超絶的なメイクテクニックに感動していた。

普通の、いや、今まで私が見てきたお客さんと同じように、女装の喜びを知ったという充実感が体中から溢れていた。

その表情は私を明るい気持ちにさせてくれたはずだ。

「香里さんはここにきてよかったと思う。みんなとも仲良くなれたし」

「それだけ言えれば上等よ。けどだね」

ちらりと私のほうを見る。

「ミキの言葉、うそ臭いのよ」

心がぐしゃりと潰れるのがわかった。

綾姉はひどい。平気で私の価値観の意味を変えようとする。

そしてそれは人と付き合う上で、確かに有効に働いてしまうのだ。

彼女は私を何にしたいのだろう。そう考えると私は怖くなる。

自分のいいところは残してくれるだろう。

けれど悪いところを全部そぎ落とされたとしたら、それは本当に私なのだろうか。

私は綾姉の横顔をこっそり見た。そして彼女の昔の姿を想像してみる……が、出来ない。

私が持っている彼女の情報はあまりにも少なすぎた。

お店の手帳を見ればそれが分かるだろうか？ いや、それは間違った方法なのだろう。私はどうも融通が利かない。

「あなたが守りたかったものって、何だったのかしら」

ビールを飲み干してしまうと綾姉はさっさと帰ってしまった。私はしばらくそこから動けない。動くと考えている事が飛び散ってしまいそうな気がした。

私が守りたかったもの。そう考えるとトーコの顔が浮かんだ。そしてお客さん全員の顔も。綾姉は違う。彼女には守られているような気がする。……これだけ？

最後に事務的な口調で話している自分の顔が浮かんで、嫌になってため息をついた。綾姉はこの先を要求しているのだろう。でも私は見つけれない。見つけてやるもんか、とすら思う。

私はグラスを片付けてから洗面所へ向かった。女の時間はもう終わりだ。顔の化粧をきれいに落として、ティッシュペーパーには除光液を染み込ませる。それをすつとを滑らせるだけで爪の赤は消えてしまった。

悲しくもなんともない。私には一日が二度あるだけだ。

緑色のコートを着た女性の写真が二枚ある。片方は私が、もう片方は岩崎写真館の店主である岩崎源次が現像したものだ。パソコンのソフトウェアを使って行う現像処理は、フィルムのそれとは全く異なる。写真を見ながら色合いを好き勝手に補正できてしまうのだ。写真が暗ければ明るく出来るし、照明によって色が変わってしまったコートを本来の色に戻してやることだって出来る。もちろんその知識と技術があればの話だけれど。

「ま、比べるものが間違ってるわよ」

岸本葉子は笑いながら二枚の写真を取り上げた。私より三つ年上の彼女は女性向け旅行雑誌の副編集長をしている。自分が担当している雑誌で使用する写真を、わざわざ岩崎写真館に持ち込んで現像させる、という珍しいお客さんだ。

通常この店ではそんなサービスを行っていないが、彼女の父親の代からの常連ということで特

別対応となっていた。

月刊誌なので一ヵ月に一、二度しか来ない。

しかし来ると必ず岩崎さんを指名して、写真が出来上がるまでの間は私と二人で服やご飯の話をする。

彼女は男と女、両方の私を知っている唯一の友人でもあった。

「でも、いい色出せるようになってきたじゃない。ディティールもしっかり出てるし」

「そうかな。これと比べると全く自信なくなるよ」

私は彼女の手から写真を抜き取った。

コートの緑は確かに近い。

しかしその後ろの街の色が微妙に違う。

同じ写真を現像しているのに、片方はコートだけがいやに目立ち、もう片方は街の色彩と調和して、

コートを着た女性に物語を与えていた。

「だから比べるものが間違ってるって言ってんじゃないの。あ、源さん、これありがとね」

「おう」

お店の奥から岩崎さんが顔を出した。

彼は私が持っていた写真を取り上げ、すぐに私に返す。

彼からは煙草のにおいがした。

私の周りでキャビンを吸っている人は、この人と父だけだ。

岩崎さんは今年で四二歳になる。

「厄年だからな、今年は慎ましく生きるぜ」と豪語していた割には酒も煙草もパチンコもガンガンやっているパワフルなおっさんだ。

「これなら三紀男でもわかるだろ」

「青のハイライトですよ。あとシャープネス」

彼とのやりとりはそれで終わった。私は三紀男と呼ばれると無力感を感じる。

齊藤三紀男という人間は神戸に捨ててきたつもりだったのに、未だに私の生活の大部分はこの名前で埋め尽くされているのだ。

いつかはなくしてしまいたいと思っている。けれどたぶん、なくすことは出来ない。

「葉子。お前んとこのカメラマン、いつになったらライティングに気を使えるようになるんだ？」

「ごめんねえ。きつく言ってはいるんだけど、やっぱり本業じゃないしね。難しいみたい」

「ならさっさと雇えっての。こんな詐欺みたいな仕事やってるといつか捕まりそうだ」

そう言って二人は笑った。

葉子が勤めている出版社は小さなところなので、ライターがカメラマンを兼ねてしまう事が多い。

多少はカメラ好きと言ってもプロではないため、出来上がってくる写真のレベルはあまり高くなかった。

それを雑誌に載せられるレベルにするために、葉子がこの店へ来るのである。

「二流のカメラマンに頼むよりは、三流のカメラマンに撮らせてここで補正してもらった方がずっといいからね」

と葉子が言い、岩崎さんはそれに「その方が安くつくしな」と付け加えた。

年は十以上も離れているけど仲のいい二人だと思う。私はその間に挟まれると、自分の立ち位置をどこに置けばいいのか分からない。葉子は気安く話せるからいいのだけれど、岩崎さんとなると話は別だ。

私は彼に対して畏れのようなものを常に感じていた。

素人なりにも写真に興味を持ち始めた私にとって、岩崎源次という人は師匠のような存在だったのだ。

全ての写真をチェックし終えた葉子は、私たちに改めて礼を言ってから慌しげに帰っていった。

時間はまだ三時を過ぎたばかりだ。

この後は若い夫婦が赤ちゃんの写真を撮りに来る予定になっている。

生まれたばかりの子供を撮り、その手や足も撮り、小さなアルバムにして渡すのだ。

変なサービスだなあとは思うけれど、あればあったで嬉しいものなのかもしれない。

どちらかという、親が。

私は一度咳払いをしてから、子を持つ親の意見を聞いてみた。

「岩崎さん、潤くんが赤ちゃんの頃の写真って撮りました？」

「俺が子供の手足を撮るように見えるか？」

「見えませんね」

私が答えると、岩崎さんは大きな声で笑い出した。

「撮ったんだよ。潤の写真は何千枚撮ったか覚えてない。

あの頃のデジカメはひどい画質だったからな、フィルム代も馬鹿にならなかった。しかしまあ現像代とプリント代は浮いたからな。写真屋やって良かった」

今年中学校を卒業する潤くんは、母親に似たのだろう、素直でなかなか気の利く少年だ。彼は手品が趣味らしく、店番で暇を持て余している私に色々な技を見せてくれた。というか、どうやら私を練習台にしているようだった。そのへんのしたたかさは父親似か。

「岩崎さんが潤くんの写真を撮ってるとこなんて見たことないですよ」

「お前も父親になったら分かる。子供がかわいいのは小さい時だけだ」

「そんなもんですかね」

私が父親になる事はない。

これは意志の問題以上に、身体機能の問題だ。

女性ホルモンを飲み始めてもう三年になる。

性欲はまだ残っているものの、精液はさらさらでおよそ精子らしいものは見当たらない。もしかしたらひとつくらいあるのかもしれないが、たった一つの、それも女性ホルモンに侵されきった精子で子供を作ろうなどとは思わない。

私は自分の子供を全て捨てたのだ。

写真を撮る事はおろか、顔すら見る事ができなかった。

後悔はある。けれどそれを抱えて歩こうと決めた。だから私は何とか笑うことが出来ている。

写真館のアルバイトを終えて携帯電話を見ると、葉子からメールが入っていた。

最近遊んでないだろ付き合い、ということらしい。

週に一度しか休みを取れない葉子なので付き合いやりたいたいところなのだけど、残念ながらレムを休むわけにはいかない。

今日はだめだと返信すると、すぐに「明日ならいいでしょ」と返ってきた。

さすが葉子、よくわかっている。今週の水曜日はレムも写真館も休みのゴールデン・デイなのだ。

明日の正午に四谷のカフェで待ち合わせる事にして、私は地下鉄の駅へ降りて行った。

.....小指の花びら【3】につづきます